人間の創造と罪

B. Nowak svd

第一章　天地の創造

天地創造の物語（創世記 1,1-25）は、世界の創造の過程を描いているように見えますが、聖書全体と同じように、この物語が書かれたのは、私たちに科学的な真理を教えるためではなく、救いのために必要な真理を教えるために描かれました。

具体的に言えば、天地創造の物語は、世界が出来た過程や世界の構造について教えるのではなく、人間の最も根本的な問い、すなわち、世界と人間の起原（きげん）とその目的、世界と人間の存在の意義に関する問いに答えているのです。

存在しているすべてのものは、神によって創造されたもの

まず「天地」という表現は、存在している、神以外のすべてのもの、つまり、「天」と言われている霊的な世界と「地」と言われている物質的な世界を表しています。天地創造の物語の基本的なメッセージとは、世界、つまり存在しているすべてのものは、神によって創造されたということです。

神の創造のわざを理解するために、そのわざの特徴と人間の物作りの特徴を比較してみたいと思います。

神の創造わざの特徴

人間は、何かを作るために、材料を必要としていますが、神は、「存在していないものを呼び出して、存在させる」（ロマ 4,17）。すなわち、神は、何かを造るために、何の材料も使いません。「ことばを語る」だけで、神が求めているものが存在するようになるのです。

人間の作者は、自分の作品と異なる存在であるという意味で自分の作品

を超越しています。同じように、神は、創造してくださった世界を超越しています。逆に言えば、被造物は創造主の一部ではなく、神と別の存在です。

出来上がった作品は、その作者と別の存在であるだけではなく、その存在は作者の意志や意識、また、存在に依存していません。というのは、作者は、自分の作品のことを嫌いになっても、それを忘れても、死ぬことによって存在しなくなっても、作品は、破壊されない限り、存在し続けます。人間の作品と違って、無から引き出された被造物は、神の存在に預かっています。そのために、創造主に完全に依存しています。存在しているすべてのものは、神によって求められ、常に支えられているから、存在し続けているのです。この意味で、神は、創造してくださった世界を超越しておられながらも、創造してくださったものの存在を常に保つために、被造物の最も深いところに内在しておられます。

人間が作ったものは、その人の想像とか、意志や思想などを表しているし、その作品に作者が与えた目的があります。けれども、作者が自分の作品を手放したら、その作品は、作者によって与えられた目的を果たさない可能性も、他の人によって全く違う目的のために使われる可能性もあります。

神が創造してくださった被造物も、その「作者」である神の意志や望みを表しています。けれども、神は、ご自分の「作品」を手放すことがありませんし、その存在を支えるだけではなく、それを創造の時に与えた目的に導いてくださいます。そのために、神が創造してくださった世界は、必ずその目的に辿り着くのです。このような神の働きは、神の支配や神の摂理と呼ばれます。

創造されたすべてのものは、善いもの

天地創造の物語のもう一つの大切なメッセージとは、創造されたすべてのものは、神によって善いものとして創造されたということです。

けれども、世界は、善いものとして創造されても、完成したものとして造られたものではありません。この世界は、ある意味で、教会が教えてい

る通りに、「完成に『向かう途上』にあるものとして造られました」（カトリク教会カテキズム 302）。この完成は、神が定めた世界の目的であると言えます。

世界は、神によって善いものとして創造されたにもかかわらず、私たちが毎日のように様々な悪を体験しているのは、事実です。ですから、聖書の教えを受け入れるためには、なぜこの世に悪が存在しているかということを理解する必要があります。ある意味で、聖書全体がこのような問題について語っていますが、天地創造の物語の一部である人間創造の物語は、悪の起源を示しています。

悪の存在の理由について話す前に、まず人間創造の物語が伝えている基本的なメッセージを紹介したいと思います。

人間の創造　（創 1,26-31；創 2,4-25）

創世記には、人間の創造について語る二つの物語があります。この物語は、人間の創造について全く違うことを語っていますので、両方とも、実際に起こったことを描いているとは、言えないと思います。言い換えれば、この物語の文字通りの意味は、互いに矛盾しているということです。けれども、この物語の霊的な意味、つまりこの物語が伝えている真理を見出すと、その真理は矛盾していないだけではなく、互いに補い合い、人間の本性、また、人間の存在の意義とその目的について、統一したことを教えているということが分かります。

創世記の第 1 章において、神は非常に不思議なことを語ります。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」（創 1,26）ということです。また、第 2 章は、人間の創造を次のように描いています。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創 2,7）。

「土の塵」が表しているのは、人間は、この世のものであるということです。「命の息吹」が表しているのは、人間は、この世のものではない、何か神聖なものをもっているということです。この「神聖な何か」とは、人間の肉体を生かす霊的な次元、人間の内部の最も深いもの、人間を特別に

神の似姿とするものです。私たちは、それを霊的な魂、つまり、霊魂と呼びます。

実は、人間の肉体と霊魂の結合は、人間の本性となっています。したがって、神が創造してくださった世界において、肉体的な存在であると同時に霊的な存在である人間が、自分の本性の中に、霊的な世界と物質的な世界を一つに結ぶ唯一の存在であるということになるのです。

霊魂の働き

他の物質的な被造物に見られない人間の能力と他の特徴は、人間の霊的な次元や、霊魂の働きを表しています。

それは、まず、知能と理性、つまり、論理的に考え、物事の本質やその意義を知る力です。

それらは、自己意識、つまり、自分の存在を自覚し、自分を知る力です。人間には、動物と同じように本能がありますが、動物とは違って人間は、自分の本能の虜になっていません。というのは、自分の内から来る「刺激」に従うか、それに従わないか、自由に選択することができるからです。この可能性を自由意志と言います。

理性によって善悪を知り、自由意志によってどちらかを選ぶことの出来る人間の行動には責任があると同時に、道徳的や倫理的な価値があります。理性と自由意志のために人間は、愛することも、罪を犯すことも出来る、物質的な被造物の中で唯一の存在なのです。

神に象って、神の姿として創造されて、以上の特徴をもっている人間は、神ご自身と同じように、「何か」ではなく、「誰か」であり、つまり、ただの「物」や「理性的な動物」ではなく、神と同じように人格的な存在、また、ペルソナなのです。

第二章　人間創造の目的

創世記の第二章の人間創造の物語では、神が人間を創造してくださったときには、「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった」（創 2,4）のですが、神は、「東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ」（創 2,8-9）ました。

この物語によって聖書が教えているのは、全世界は、人間のための神の賜物であるということです。この賜物は、人間に対する神の愛の表現です。

時にエデンの園は「楽園」と呼ばれています。おそらくそのために、エデンの園で人間は楽しく遊んで生きていたと考えている人がいるのではないかと思います。けれども、聖書を注意深く読むと、そのような考え方は間違っているということが分かります。というのは、聖書には、「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」（創 2,15）とはっきり書いてありますので、神が人間をエデンの園に住まわせたのは、遊ぶためではなく、働くためなのです。

第一章の物語は、別の言葉を使っていますが、同じように人間の仕事について語ります。「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ』」（創 1,28）。この言葉に基づいて、人間が地球を自分たちの利益のために、好き勝手に利用する許可をもらったと考えている人がいるようですが、この考え方は、全く間違っています。実は、地を従わせることと生き物を支配することは、園を守ることと、それを耕すことと同じことを意味しています。すなわち、人間が神から、世界の完成のために神に協力する使命を与えられたということです。

創造のわざの完成への人間の協力

確かに、全能の神が世界を完成させるために、被造物の一部で、神と比較したら無に等しい存在である人間の協力を求めるのは、実に不思議なことです。けれども、完成した世界の在り方、その本質が分かると、神が人間の協力を求めておられるわけも分かると思います。

実は、イエス・キリストが宣べた神の国が、創造のわざの完成で、世界の完全な状態なのです。神の国についてより詳しく話す機会が沢山ありますが、簡単に言えば神の国とは、神の愛を受け、愛をもって神の愛に応えた人々と神との完全な愛の交わりを実現した状態のことです。この完全な愛の交わりは、人間が創造された目的であって、人間にとって最高の幸福の状態です。

神の国の完成は、世界の完成にもなります。ですから、人間は、世界を発達させるということによってではなく、愛に生き、愛において成長することによって人生の目的に近づくと同時に、創造のわざの完成に協力するわけです。世界の発達のため、また、世界をより良いところにするために働くことは、その働きが愛の表現であるときだけ創造のわざの完成に協力することになるということが言えると思います。

人間は、そのような意味での人生の目的に向かって生き、それに辿り着き、永遠に神との愛の交わりに生きるために、神にかたどって創造され、理性と自由意志と共に、愛する能力を与えられたわけです。

神と人間の相互の愛が完成された世界の本質になっているからこそ、神は、全能の方であっても、世界を完成させるために人間の協力を必要とされています。なぜなら、愛は自由な選択に基づくものであるため、神さえも人間に愛させることが出来ず、人間が自ら神の愛に愛をもって応えることを自由に選ばなければならないからです。

創世記の人間創造の物語は、そこまで詳しく教えませんが、この物語においてもこの真理をある程度まで見出すことが出来ます。

神との完全な愛の交わりへの一般的な道

創世記の第一章において、神はご自分に象って人間を男と女に創造されたと言われることによって、男女の平等と男女の同じ尊厳が表現されています。第二章の物語では、まず男が創造されてから、男から女が創造されたということが言われています。確かに、話は異なっていますが、この物語は、第一章の物語が伝えている真理に矛盾するのではなく、人間が男性と女性として創造された理由を説明しているのです。

この物語において神は、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創 2,18）と語っています。

「人が独りでいるのは良くない」という言葉の意味は、人間は、独りで生きているときに、孤独で、不幸であるから良くないということではなく、人間が自分のためにのみ、つまり自己中心的に生きるのが良くないということです。というのは、神との完全な愛の交わりに生きるために創造された人間は、愛に生きるとき、つまり誰かのために生きているときにだけ、神が定めた目的に向かって歩み、人間らしく生きているからです。

人間に「合う助ける者」とは、普段の仕事を助ける動物や人間のことではなく、愛の対象になれるもの、つまり、愛の対象になることによって、愛に生きる使命を果たすのを可能にするものという意味です。

神は、アダムの前にいろいろな生きものを連れてきてくださいましたが、人間は、「自分に合う助ける者は見つけることができなかった」（創 2,20）、つまり、この生き物の中には、普段の仕事を助けることの出来るものがあっても、愛の対象になれるものがなかったという意味です。

自分のあばら骨で造り上げられた女性を見たアダムの口に、「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉」（創 2,23）という言葉を入れることによって聖書は、男女の平等と同じ尊厳を再び教えるだけではなく、男性にとって女性が、女性にとって男性が、神が定めた「自然な」愛の対象であるということを教えています。

それから、「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」（創 2,24）という言葉によって、男女の結婚生活は、神との完全な愛の交わり、つまり神との一致に導く一番一般的な道であるということが教えられるのです。

ちなみに、人生の目的に導く道である結婚生活は、旧約聖書においても、新約聖書においても、人生の最終的な目的、つまり、人間と神の完全な愛の交わりの象徴としてよく用いられているのです。

罪を犯す前の人間の状況

知恵の書において、次の言葉が書かれています。「神が死を造られたわけではなく、／命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない」(知 1,13)。また、「神は人間を不滅な者として創造し、／御自分の本性の似姿として造られた。悪魔のねたみによって死がこの世に入り、／悪魔の仲間に属する者が死を味わうのである」(知 2,23-24)。要するに、元々人間は、死ぬことと、死に先立つ苦しみを体験することなく、神との完全な愛の交わりに向かって生きることになっていたということです。

教会が教えている通りに、創造されたときに人間は、「創造主との親しい交わりと、自分自身、また周囲の被造物との調和のうちに置かれていました」(カトリック教会カテキズム 374)。さらに、「聖性の状態に置かれた人間は、神によって栄光のうちに完全に『神化される』はずでした」(カトリック教会カテキズム 398)。すなわち、人間が神の本質である神性に預かることによって、神と一致して、神のようになることを神が望み、計画しておられたということです。

残念ながら、人間は罪を犯し、このような神の計画に逆らってしまったために、知恵の書が教えているように、死と共に苦しみがこの世に入ってしまったのです。

第三章　天使と人間の堕罪

自由意志を与えられている人間は、正しい選択をするために、つまり自分に害を与えるものではなく、自分を生かすものを選ぶために、神に頼るしかありません。というのは、有限の存在であり、限られた知識しかもたない人間は、自分に可能なすべての行動の結果を知りませんが、神は、全知の方であるためだけではなく、ご自分が創造してくださった世界に与えた法則とか、人間の本質などを完全に知っており、人間のすべての行動の結果も過ちなく知っておられるからです。また、神は、嘘をつくことが絶対にありませんので、神のことばを信頼することが出来るからです。

エデンの園において人間が、神に言われた言葉、すなわち、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創 2, 16-17）という言葉は、この真理を表しています。善悪の知識の木の実を取って、それを食べることは、神のことばや神の意志を無視して行動し、自分で自分の生き方を決めるということの象徴です。そのような選択の結果が、死であるとは、神が定めた人生の目的にたどり着く代わりに、命の源である神から離れてしまうということなのです。

創造されたばかりの人間は、神との親しい関係に生きていたために、神の望みを直観的に知っていたので、各行動について神に尋ねる必要がなかったし、神の望みに従うことも人間にとって自然で、簡単なことでした。人間は、神を信頼して、神の導きに従っていた内に安心して、人間らしく生き、何も苦しみを知らずに、神が定めた人生の目的に向かって確実に進んでいました。

堕罪した天使であるサタン

人間の堕罪を描いている物語は象徴的な形を以て、歴史的な事実を表

しています。この物語に登場する蛇は、神話的な存在ではなく、悪魔やサタンと呼ばれている現実的な存在の象徴です。サタンは、元々神によって霊的な存在で、天使と呼ばれている神の使いとして創造されました。この天使は、本質的に善いものとして創造されたが、神に反抗した結果、堕罪してしまいました。

天使は、人間と同じように自由意志をもっていますが、人間よりもはるかに優れた知能をもっている存在です。人間と違って、天使は、自分の行動の結果を知っています。神とその支配を拒絶すれば、神の望みに適わない悪の存在になってしまうという結果をはっきりと意識した上で、神を拒絶することを自由に選んだ一部の天使は、堕罪した状態に永遠に生き、回心することも、神と和解することもできないわけです。

自分の本質に逆らう生き方をし、元々の美しさや幸福を失って、悪意と憎しみに満ちた存在となった天使、すなわち、サタンは、神と完全な愛の交わりに生きるために創造された人間を妬み、人間も神に反抗して、悪魔と同じ状態になるために、人間が創造された時から今に至るまで人間を誘惑したり、攻撃したりする、人間の最大の敵なのです。

確かにサタンは、人間よりも優れた知能と力をもっていますし、人間に害を与え、最終的に人間を神から引き離すように全力を尽くして働いていますが、人間と同じように被造物にすぎない存在ですので、神が許す範囲においてだけ働くことが出来るのです。従って、人間は、サタンより弱くても、神に信頼して、神の力に頼り、神の導きに従っているならば、悪霊とそのわざを恐れる必要がないのです。

原罪　（創 3, 1-10）

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」（創 3, 4-5）という言葉を以て、「嘘の父」であるサタンは、人間の心に神に対する疑いをもたらすために、神を人間の競争の相手として、人間を騙す嘘つきとして、

また、人間の幸福を妨げるものとして、見せようとしました。

それから、神が定めた人生の目的が生み出す人間の最も深い望み、すなわち、神のようになりたいという望みを実現する別の方法がある、つまり神が示した方法ではなく、もっと楽で、しかも、人間の力だけで用いることのできる方法があると嘘をついて、神を無視して、自分の運命を自分の手に入れるようにエバを誘惑しました。

サタンの嘘を信じたエバは、非現実的なもの、つまり、神無しに神のようになるのを求めるようになりました。この非現実な望みを実現しようとした試みの結果は、当然ながら、期待通りにならなかったのです。すなわち、エバは、神のようになる代わりに、神との親しい交わりを失ったと同時に、神の輝きを失った意味で、「死んだ」ということです。要するに、「嘘の父」である悪魔の約束が実現されずに、いつも真実を語る神のことばどおりの結果になったということです。

この物語においてエバは、善悪の知識の木から取って食べた実をアダムに渡してアダムもそれを食べたということになっています。それによって、アダムは、エバと同じようにサタンの嘘を信じて神に反抗したということが言われているのではく、人々は、同じ人間性で結ばれているために、一人の人の罪は、その人の個人的な問題ではなく、他の人にも影響を与えて、他の人もその結果に預かるということが教えられているのです。実は、源の罪を犯した人間の子孫であり、彼らから人間性、しかも、罪によって傷ついた人間性を受け継いでいる私たちを含めるすべての人々が、原罪と言われているこの人間の最初の罪の結果に預かっているのです。

原罪がもたらした結果

罪とその結果について、後でもっと詳しく話しますが、人間の堕落についての聖書の物語を理解するために、罪に対する罰についての教会の教えを紹介する必要があると思います。それは、「罰」と言われているものは、「外部から神によって行われる一種の復讐ではなく、罪の本性

そのものから生じるものと考えるべき」（カトリック教会カテキズム1472）であるということです。すなわち、聖書は、罪を犯した人間が神から与えられた罰について語っているところを、人間が犯した罪の結果として理解しなければならないということです。

原罪の結果は、主に四つあります。まず、最も重要な結果として、人間が神との親しい関係を失い、神の善意と神の愛、また、神の望みを知らないようになったということです。そのために、神は人間の最大な味方であるにもかかわらず、人間は神を恐れ、神から遠ざかっていて、自分や他の人の判断に従って生きるようになっているわけです。第二の結果は、悪霊がより簡単に人間に近づき、人間を攻撃し、人間を騙すことが出来るようになったということです。第三の結果は、人間同士の関係に関するものです。すなわち、人間は、自分自身の尊厳と他人の尊厳を知らないようになり、互いに愛し合い、協力し合う代わりに、争ったり、他者を利用したりするようになったということです。第四の結果は、他の被造界との関係に関するものです。元々の調和と秩序が破壊されたために、様々な災害が起こるようになったと同時に、人間が病気するようになり、最終的に、死ぬようになったということです。

救いの約束

サタンは人間を自分の罠に落し入れ、罪に導いた後に、神は、サタンに向かって次のことばを語りました。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創 3,15）。

この言葉は、悪に打ち勝つ約束です。つまり、神が必ず人間を罪の結果から救い、ご自分の最初の計画を実現してくださるという約束です。神は、この約束をマリアから生まれたイエス・キリストを通して成就してくださいましたが、その救いに預かるために、イエス・キリストを信じ、イエスに従う必要があります。

イエス・キリストが成し遂げた救いのわざを理解し、その恵みを受けるために、罪のこと、その働きと結果のこと、それから罪のゆるしのことを正しく理解する必要があると思いますので、次の章から罪と罪のゆるしについてお話したいと思います。

第四書　罪人とは

日本語では、罪という言葉は、神との関係においてだけではなく、法律との関係においても使われています。法律を犯すことは、犯罪と言われていますし、人が犯罪を行ったことが裁判で証明されたら、この人は、有罪になって、容疑者から犯罪者となり、刑罰を受けます。

イエス・キリストが罪人を救うためにこの世に来られたと聞く、キリスト教を知らない日本人は、イエスは、犯罪者の刑罰を免除するために来たように理解している人もいるのではないでしょうか。このように考えている人は、自分が法律を犯したことがないし、犯罪者ではないので、イエスは自分と何の関係もないと思っても不思議ではないと思います。また、その人が犯罪人の刑罰を免除することは不正であると思っているならば、イエスのことに興味がないだけではなく、イエスが自分の正義感に逆らう活動をしたと思って、イエスに対して怒りを抱いたとしても、当然かもしれません。

実は、イエス・キリストは、何の犯罪を行わなかった人のためにも、一般的に善い人であると思われる人のためにも来てくださいました。言い換えれば、法律において無罪な人だけではなく、普段、正しい人と思われる人のためにも来てくださったのです。このことが分かるために、まず、聖書が使う「罪人」という言葉の意味、さらに「罪のゆるし」や「罪人の救い」のことを正しく理解する必要があると思います。

堕罪後の現状と人間の使命

人間の堕罪の物語の後の物語、つまり、カインがアベルを殺したこと（創 4,1-26）、洪水（創 6,1-9,28）とバベルの塔（創 11,1-9）についての物語をもって聖書は、不正や他の悪に満ちた現実を描いています。私たち

は今でもこの現実を体験していますので、世界が人間による悪で満たされているという事実について、誰をも納得させる必要がないと思いますが、殆ど誰も、私たちの世界がどうして、このようになっているかということが分からないようです。聖書は、堕罪の物語に続くこのような物語を通して、悪と苦しみに満たされているこの現状は、原罪の結果であるということを教えているわけです。

人間は、自分の心を正直に見つめると、自分自身には、悪への傾きがあるということを認めると思います。すなわち、自分にとって善を行うよりも、悪を行う方が簡単ですし、正しいことを選ぶよりも、愉快なことや快楽で、楽なこと、また、自分の利益になるものを選ぶのは簡単で、自然に感じる選択なのです。このような悪への傾きも、原罪の結果なのです。

人間の本性は、原罪によって深い傷を負わされても、今でもすべての人々は、人間の本性に従って善や幸福や愛を求めています。けれども、善を求めても、善とは何であるかよく分からないために、実際に悪を行うことがあります。　幸福を求めても、人間に相応しい幸福とは、何であるかということを知らないために、努力すればするほど、幸せになる代わりに、段々と不幸になっています。また、愛を求めても、愛が何であるか分からないために、愛するつもりで、相手を利用したりして益々自己中心になってしまうこともよくあります。

愛に生きるために創造された人間は、誰も愛することが出来ないならば、創造主である神が求めておられるような存在になっていないということになります。人間は、自分の本性に従って愛に生きる代わりに、その本性に逆らって自己中心に生きているのは、創造主であると同時に、愛の源である神と正しい関係に生きていないからです。考えてみれば、罪の本性は、堕罪の物語が示しているように創造主である神に反抗することですので、罪を犯すことによって人は、神との正しい関係を失います。そのため、自分の本姓と同時に、神の望みに敵わない存在になって

いる人間は、個人的に何も悪いことをしていなくても、聖書において罪人と呼ばれているわけです。

確かに、人間がこのように罪の状態に生まれてきたことは、一人ひとりの人の個人的な選択の結果でなければ、個人のせいでもありません。それは、最初の人たちが犯した罪の結果です。確かにこの結果は、苦しいことではありますが、同時に、一人ひとりの人にとって、神との正しい関係、つまり、神が求めておられる関係に戻り、再び、神が定めた人生の目的に向かって歩み始めるチャンスなのです。実は、このような堕罪後の状態から立ち直って、神が求めておられるような人間になるのは、この世に生まれてくる目的であり、一人ひとりの基本的な使命なのです。

個人が受ける社会の影響

最初の人々は、神との親しい交わりの内に生きていましたので、人間の心の望み、つまり、人間の本性に従って、人間らしく生きるために必要な知識を直接に神から学んでいました。神との親しい関係をもたずに生まれる私たちは、人生のことや価値観などを自分の家族や教育者や他の人から学び、また、文化や法律によって教えられます。

けれども、この教えは、必ずしも正しいものではありません。というのは、私たちに人生のことや価値観を教えている人たちは、善意の人ばかりではないし、嘘をつく人もいます。善意の人であっても、間違っていることがあります。それから、文化や法律は、限られた知識しかもっていない人々、しかも、少なくとも部分的に違っている情報や思想をもっている人々によって作られているからです。

それだけではなく、国民を支配する役割と同時に、教育する役割を果たしている法律は、国民の一人ひとりの善のみを求めて作られたものではありません。法律は、権力者にとって国民を管理しやすくするためと

か、あるグループの権力や利益を確保するためや、国家のために役に立つ人を育てるために作られていますので、人間の本性に逆らうところがあって、人間らしく生きることを可能にすることや人間を幸福に導くことが出来ないだけではなく、人間らしく生きることと、幸せになることを妨げるようなところもあるのです。

考えてみれば、全ての人々が同じ本性を所有していても、生まれ育った家族、環境、文化、政治的な制度、また、受けた教育などによって、ずいぶん異なる価値観や人生観をもっているのは、そのためです。

自分の生き方に対する個人的な責任

人間は、ある社会の一員として生まれているため、その社会がもっている人生観や価値観を受け継ぐのは、当然です。けれども、子どもの時に間違ったことを教えられたから、人間らしく生きることも、愛することも、幸せになることも出来ないということは言えません。言い換えれば、自分の正しくない生き方を社会や他の人のせいにすることが出来ないということです。なぜなら、堕罪によって神との親しい交わりを失って、傷ついた本性を受け継いでも、人間は、今でも理性によって真理を知ることも、自由意志によって善を選ぶこともできるからです。人間に相応しい幸福や真の愛、それから善悪などとは、何であるかということを知るために自分に出来ることをするのが、一人ひとりの個人的な責任なのです。

第五章　個人的な罪とその結果

　堕罪の結果として人間の本性が傷ついても、基本的には変わりませんでした。すなわち、私たちも、最初の人間と同じように愛に生きるため、最終的に愛の完成によって、神と一体になるために生まれています。

　また、最初の人と違って、私たちは神との親しい関係をもたずに生まれているために、神の望みをはっきりと知らなくても、神は創造のときに最初の人々を愛しておられたのと同じように、私たちを愛してくださり、私たちの存在の最も深いところに常におられ、私たち一人ひとりを愛の交わりへと招いてくださっています。

　この招きこそ、人生の目的と正しい生き方を示しているので、この招きを受け入れ、それに応じるならば、誰でも、人間の本性に沿って生き、神との愛の交わりを深めながら、神が求めておられるような人間になることが出来るのです。

人間の良心とその教育

　教会は、愛の交わりへの神の招きのことを、「良心」と呼びます。そして、「良心の声」、すなわち、神の招きを聞き取るための努力を「良心の教育」と呼びます。私たちは、「良心の声」を正しく聞き取ることが出来ずに、これを教育しなければならないのは、育ちや教育や他の様々な影響のために、神の望みと異なる確信をもっているからです。「良心の教育」として、私たちは人間の本性、つまり自分自身を知るように努めること、それから、普遍的な善と悪とは何であるか、愛とは何であるかということを知るように自分に可能なことをしなければなりません。

　人間の望みや人間の働きとその結果から学んで、人間のことをある程

度まで認識することは可能です。実際に、哲学者と呼ばれている人々は、組織的に人間のことや、人間が生きている現実について考察しています。特に、何の先入観や下心のない哲学者、例えば政治的な目的をもっていない、正直な哲学者の場合は、このような働きには、大きな意味があります。けれども、哲学の歴史と様々な哲学者のずいぶん異なる結論、多くの場合、互いに矛盾している結論や、常識的な事実を無視している結論を見ると、哲学はあまり頼りにならないし、混乱をもたらす恐れもあると思います。

良心を正しく育てる一番確実な方法は、イエス・キリストの教えと生き方を学ぶことです。なぜなら、イエス・キリストによって、創造主である神ご自身が私たちに正しい価値観と正しい人間観と同時に、はっきりとした形で、愛の交わりへの招きを表現してくださったからです。

個人的な罪

間違った教育を受けたために人間の本性とか、善悪などを正しく認識していないことや神を知らないことは、本人の過ちの結果でもなければ、個人的な責任でもありません。けれども、自分の良心を育てることが可能であっても、すなわち、正常に働く理性をもっていて、学ぶ自由と可能性があっても、良心を育てるために何もしていない、つまり、神や人生についての真理を追究していないならば、神や人間の本性に関して無知や過ちに留まることは、自分自身の責任となるのです。

そのために、この人は、わざと行う悪やわざと怠る善に関してだけではなく、無知や間違った認識のせいで行う悪や怠る善に対しても、責任があります。悪を行い、善を怠ることは、神や他の人に対する愛ではなく、自分の利益になると思うようなものを選ぶことですので、この選択こそ、この人の個人的な罪となるのです。

罪の働きとその結果

1. 人間が受ける害

罪とは、神の望みと同時に人間の本性に逆らう言葉や、行いや、望みですから、罪を犯すことによって人間は、たとえそれが罪であるということが分からなくても、何らかの害を受けます。しかし、多くの場合、この害は、例えば火傷と違って、すぐには見えないし、感じないようなことです。また、罪を犯した人は、何の痛みも感じないだけではなく、安心感や満足感や喜びなどのような愉快な感情を抱くことがあります。そのために、罪を犯しても、「何も悪いことが起こらなかった」とか、「罰せられなかった」と思って、これから気楽に罪を犯してもいいというような結論を出す人が大勢います。

ときに、罪がもたらした害に気が付いても、それは、罪となっている自分の行動と何の関連も見出さないことも多いのです。確かに、それによって罪を気楽に犯し続けることができますが、自分自身にますます大きな害を与え続けるのです。

2. 良心（価値観）の悪化

自分が罪を犯した経験、少なくとも悪いと思ったことをした経験を注意深く見つめてみたら、必ず生じる結果を見出すことが出来るはずです。人間は何等かの行いが悪であると思っているならば、それをするように誰かに誘（さそ）われるとき、それとも、自分がしたいと感じているときに、この行動に関して違和感や抵抗、または、恐れを感じます。この違和感や抵抗や恐れは、罪を犯さないように注意する「良心の声」として考えることが出来ます。人間は、この「良心の声」を無視して、悪いと思うことをするならば、罪悪感を覚えます。この罪悪感も、悪を行うのをやめさせようとする良心の働きとして考えられるのです。

けれども、そのような良心の働きを無視して、自分の行動を改めずに同じことを再びしようとするときには、いわゆる「良心の声」が弱くなり、後の罪悪感も弱まります。やがて、元々悪だと思ったことをするのは、平気になり、罪を犯す前も後も何も感じなくなります。このように、私たちは、そのつもりがなくても、実際に自分の良心、つまり自分の価値観を変えていくわけです。

もし、自分の元々の確信が正しかったならば、つまり、行ったことは本当に悪であったならば、自分の価値観は、段々と正しくないものになりますし、善を行うつもりであっても、悪を行うことが頻繁になっていきます。

3. 理性と意志の弱化

自分の経験から、罪がもたらすもう一つの結果が分かるはずです。それは、罪を犯す人間の理性が段々と濁っていき、善と悪を見分けることが難しくなるということです。それから、罪を犯すことによって人間の意志が段々と弱くなるために、悪を避けることも、善を行うことも難しくなるという結果も分かるはずです。このように、罪の結果として、人間の本性は、ますます深く傷つけられますので、それに敵うような生き方は、益々難しくなるということです。

4. 依存状態

「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」（ヨハ 8,34-35）ということをイエス・キリストが教えてくださいました。この教えと多くの人の経験に基づいてカトリック教会が次のように教えています。「すべての罪は被造物へのよこしまな愛着を起こさせます」（カトリック教会カテキズム 1472）。それは、罪を犯すことによって人間が、罪の対象となっていたものとの依存状態に入るということです。

この状態に入ると、元々自分がしたくないと思ったようなことを、平気にするようになるだけではなく、元々やる必要のなかったようなことをやらずに生きることができなくなるということです。また、罪となっている行動によって自分自身や、自分にとって大切な人々に、どれほど大きな害が与えられているかということがはっきりと見えるようになっても、この行動をやめることが出来ないということ、つまり、この罪に対して自分の意志が弱くなっていくだけではなく、この罪の奴隷になって、自由意志を失ってしまうということなのです。

5. 霊的な死

罪の奴隷になった人は、神や他の人の助けを受けずに、死に至るまでそのまま生きるならば、つまり、最後まで罪に留まるならば、神が求めるような人間になるチャンスを無駄にしてしまい、結果的に、サタンと同じように神の望みに敵わない存在、自分の本性に矛盾している存在として永遠に生きる意味での「霊的な死」を向かえる恐れがあります。その結果は、最終的に、聖パウロが教えている通りに、「罪が支払う報酬は死」（ロマ 6,23）なのです。

第六章　なぜ人間が罪を犯すのか

前回見たとおりに、罪は、人間にいろいろな害を与え、自由を弱めることによって愛することを不可能しますし、最終的に永遠の死をもたらすものです。それなのに、昔も、今も、ほとんどの人々が、非常に頻繁に罪を犯しています。それは、なぜでしょうか。どうして、人々は、罪を犯すことによって、自分自身に害を与え続け、不幸を招いているのでしょうか。

一人ひとりの人が罪を犯す具体的な理由は、様々で数えきれないほどたくさんあるでしょうが、大事なのは、自分自身が罪を犯す原因を見出すことです。自分自身の罪の原因、また、この罪が自分自身の人生に及ぼす悪い影響を見だすために、自分自身の生き方を見つめる必要があるわけですが、それは、個人にしかできないこと、逆に言えば、個人がやらなければならないことです。そのような努めを少しでも支えるために、幾つか、一般的な原因について話したいと思います。

1. 誘惑

まず一つは、誘惑です。誘惑とは、実現の出来ないことを約束することによって、神の望みに反する非現実な望みを人間に与えることです。人間は、この嘘を信じて、誘惑が与えた望みを実現しようとして、罪を犯すがその結果は、期待したものと全く違うものになります。それは、正に、神無しに神のようになろうとして、善悪の知識の木の実を取って食べたエバが、神のようになる代わりに、神との親しい交わりと神の似姿の輝きを失ったのと同じようなことです。

2. 欲望

罪を犯す二番目の理由とは、人間自身の欲望です。欲望とは、人間の

本性を知らずに、自分にとって真の悪とは何であるか、真の善とは何であるかということを知らないために、自分自身に全く必要のないもの、または、自分に害を与えるものが自分にどうしても必要であると思い込んで、自分のための善としてそれを強く求めることです。

ときに求められているもの自体が罪であります。例えば、他人の妻や夫を求めるようなことです。また、求めるもの自体は、罪でなくても、この望みを実現する手段は、罪となることがあります。例えば、自分が評価されることを求めて、他人についての悪口を言うとか、相手の期待に応じるために、罪を犯すようなことです。

3. 不愉快な感情

不愉快な感情が、罪の原因になり得ます。恐れ、不安、怒り、憎しみ、悲しみなどのような感情があまり激しくなると、非常に大きな苦しみとなります。この苦しみを無くすために、この感情をもたらす問題を見出して、それを解決することが一番良い方法です。けれども、多くの人々は、すぐに楽になりたいために、不愉快な感情の原因となっている問題を解決するために時間をかけることなく、不愉快な感情を抑えるためとか、それを発散するため、または、愉快な気持ちを起こすことによって自分を慰めるために、自分に可能なことをします。多くの場合、この人々は不正な手段を用いますので、少し楽になるために罪を犯すことになるわけです。

4. 絶望

罪の次の原因として考えられるのは、絶望です。自分がいつか必ず死ぬことを意識して、自分の死を超える希望をもたない多くの人々は、人生を可能な限り楽しむことにおいてのみ、生きる意義を見出しているようです。未来に対して何の希望をもたない人々は、楽しみとなるような行動が、罪、つまり、結果的に大きな害を与えるようなものであっても、

それを気にすることなく、楽しむチャンスを全面的に生かしています。要するに、少しの楽しみのために罪を犯すということなのです。

5. 妬み

罪の原因となり得る、次のことは、妬みです。罪の状態に生きている人々は、自分の人生の意義を見出せないことや絶望感や深い悲しみなどに悩まされていて、不幸になっていても、表面的には、明るくて、楽しく、幸せに生きているように見せることがよくあります。

このような表面しか見えない周りの人々は、罪と言われている行動によって人間が人生を楽しんで、幸せに生きることが出来ると思うようになったら、自分にも幸せになる権利があると言い訳しながら、罪を犯すことによって幸せを手に入れようとすることもあります。

6. 精神的な傷

心の傷も罪の原因となり得ます。

誰かに何らかの言葉や行いによって心に深い傷を負わせられた人々の中には、被害者である自分に、加害者に罰を与えることによって正義を実現する権利、または、義務があると思う人がいます。そして、可能な手段、たとえそれは、不正な手段であったとしても相手に復讐します。いくら被害者であっても、また、正義を行うつもりであっても、相手に対して不正を行うならば、それは罪を犯すことになるのです。

7. 執着

多くの人の場合、自分の生き方への執着が、罪を犯す原因、また、罪に留まる原因となっています。自分の生き方が間違っていること、それとも罪になっていることに気が付いても、その生き方に執着しているならば、その生き方を変えることは、非常に難しいことです。なぜかとい

うと、人間は慣れてきた生き方を手放そうとするときに、今まで大切にしてきて、頼りにしてきたものを捨てるかのように、場合によっては、自分を支えてきた友達を裏切るかのように戸惑い、寂しさ、悲しみを感じます。と同時に、新しい生き方に関して心配や不安や恐れなどのような気持ちを抱いているからです。

変化に伴うそのような苦しみを避けるために、古い生き方を続けることを選ぶ人がいます。結果的に、この人は、自分の人生を正すチャンスを無駄にしてしまい、罪に留まることを選ぶことになるのです。

8. 依存関係

他の人や物との依存関係に入ったら、人間が自由意志を失ってしまいますので、このような生き方が罪であるとか、自分に大きな害を与えているということが分かって、それをやめようと思っても、自分の力だけで、やめることが出来ないために、それを続けて、次々と新たな罪を犯すわけです。

全ての罪の共通の根

人間が罪を犯す具体的な原因は以上のようなもの以外にも沢山ありますが、すべての罪の原因には少なくとも、一つの共通点があるということが言えると思います。この共通点とは、人間の神との正しくない関係です。

というのは、神を知らない人は、人間の本性を知らないから、誘惑の嘘を信じるし、自分に害を与えるものを善として考えて、それを求めています。また、神の愛と神の力を知らない人は、人生の意義を見出せないし、自分の苦しみの原因となる問題を解決する希望とか、完全に幸せになる希望をもっていませんので、罪を犯すことによって、永遠の不幸を招きながらも、直面している苦しみを和らげようとし、現在の人生を

楽しもうとしています。それから、人間は神を信頼しないからこそ、復讐しますし、不正な生き方をやめることが出来ないのです。

人間がいくら努力しても、この地上のものによって幸せになれないのは、神の似姿として創造された存在、神との愛の交わりに生きるために創造された存在として、愛の完成によって神と一体となる時だけ完全に幸せになるからです。人間は、少なくとも、人間の本性を表す自分自身の心の望みを注意深く見つめたならば、この事実をある程度まで認識して、この地上の現実を超える方向に向かって、自分の心の望みを満たす可能性を探し求めるでしょう。

残念ながら、多くの人々は、最初の人間と同じ過ちを犯しています。すなわち、神を無視して、自分の力だけで幸せになろうとしているということです。このような試みは、有意義なものであると信じることが出来るために、また、成功する可能性があるという希望をもってそれを続けるために、自分の力で満たすことのできない自分の心の望みをはじめ、現実そのものを無視します。そして、神のような超自然なものに助けてもらう必要がないという確信をもちながら、自分が作り上げた幻想の中で生きているのです。

人間は、神の似姿として創造された自分の偉大さと同時に、堕罪の結果に預かる自分の惨めさと無力さを謙虚に認めた上で、創造主で、私たちの幸福を求めておられる神に向かって助けを求めない限り、そして、神に信頼して、神の導きに従って生きるようにならない限り、いろいろな束縛から自由になることも、愛において生きることも、完全に幸せになることも全く不可能なのです。

第七書　罪のゆるし

罪のゆるしとは、どういうことであるかを理解するために、まず、罪そのものとは、何であるかを理解する必要があります。聖ヨハネが第 1 の手紙の中で次のように教えます。「罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです」（1 ヨハ 3,4)。この場合、「法」とは、人間が作成した法律のことではなく、命令や禁止の形をとる律法と言われている、神が与えてくださった掟と他の指示のことなのです。神は、創造主として人間のことを完全に知り、人間を愛しておられるゆえに、私たちの幸福を求めておられる方ですので、神が与えてくださった指示と掟は、法律を作成する人々と違って、誤ることなく何が善であるか、また、何が悪であるかということを示すのです。その意味で律法は、人間のために実際に危険なものに対する注意であり、正しい道、つまり人間の成長と最終的に幸福に導く道を示す道標なのです。神の律法は絶対に間違うことがありませんので、それに従うことは、本人にとっても、他の人々にとっても必ず良いことであり、それに逆らうことは、本人にとっても、他の人々にとっても必ず悪いことなのです。神が与えてくださった指示に従って生きることがもたらす良い結果は、「報い」と呼ばれることがあります。それから、神の指示に逆らって生きること、つまり人間が犯す罪がもたらす悪い結果は、「罰」と呼ばれることがあります。それについて、カトリック教会は、次のように教えています。「罪が二つの結果をもたらすことを理解する必要があります。・・・この二種類の苦しみ（罰）は、外部から神によって行われる一種の復讐ではなく、罪の本性そのものから生じるものと考えるべきです」（カトリック教会カテキズム 1472)。

カトリック教会は、人間が罪を犯した後に味わう苦しみは、神が罰として与えられるものではなく、罪そのものがもたらす結果であることを

はっきりと教えているにもかかわらず、司祭を含める多くのカトリック信者は、自分が犯した罪に対して神が罰を与えられると考えているし、また、神が人間の罪を見なければ、人間が自由に、つまり何の悪い結果なしに罪を犯すことができたと深く思い込んでいるようです。恐らく、このような思い込みは、日常経験の影響であるのではないかと思います。というのは、子どもの時に、別に悪くなくても、危険でなくても、両親や先生、または、私たちに対して何らかの権威を持った他の人に禁じられたことがあるのではないかと思います。両親や先生が見なければ、禁じられたことをしても、何も悪いことが起こらなかったが、そのことが両親や先生に分かったら罰という苦しい目に逢わされた経験があるでしょう。また、例えば、法律で定められている速度制限を超えることによって法律を違反しても、何も悪いことが起こらないことがありますが、警察に捕まれば、罰金を払わされることによって、苦しい思いすることがあります。人間は、自分に対して何らかの権威のある人のそのような働きを、最高の権威を持っている神に当てはめることがありますので、多くの人は、神がこの世の権力者のように振る舞っておられると考えている、つまり、人間が神の言いつけを破ったら、神によって罰せられると考えているわけです。

神の振る舞いとこの世の権力者の振る舞いとは、まったく異なっていますので、自分が権力者の言いつけを破ったり、法律に背いたりしたことに対する彼らの反応から、神について何も学ぶことができません。けれども、この経験から自分自身について学ぶことがでると思います。不注意で、まったく意識せずに、いろいろな決まりやルールを破ることがあるでしょうが、意識的に、両親や先生の言いつけに背いたり、法律や他の規則を意識的に犯したりすることもあるでしょう。両親や先生、それから、法律や規則を作った人に意向的に背くのは、彼らよりも、自分自身の判断や他の人の言葉を信頼しているからでしょう。それと同じように、神の掟に逆らうのは、それを知らないから、それとも、十分に注

意しなかったからということがありますが、それを意向的にする、つまり罪を犯すのは、神よりも、自分自身の考えや欲望、または、他の人の言葉を信頼するからなのです。自分の行動は、神の指示に逆らうということが分からなくても、そもそも神の指示がなくても、人間にとって悪いことですので、何らかの望ましくない結果をもたらしますが、人間は意向的に神に逆らうと、その行いは、その本性から生じる結果以外に、もう一つの重要な結果、神との関係に関する結果をもたらします。考えてみれば、この世において人間は信仰、つまり信頼、希望と愛によってのみ神と結ばれることができます。ですから、人間は、誠実な方である神を信頼しないことを表す罪を犯すことによって神を侮辱すると同時に、信仰と正反対であるこの行動によって、自分を神と結ばれる絆を弱めるのです。罪となる行いの重要性によって、人間を神と結ぶ絆が多少傷つけられることがあれば、人間が神から離れ、神との縁を切って、神との交わりを完全に失うこともあるのです。命の源である神から離れることは、命の源から離れること、神と繋がらなくなるのは、命の泉と繋がらなくなりますので、最終的に、聖パウロが教えている通りに、「罪が支払う報酬は死です」（ロマ 6, 23）。

確かに、いわゆる小罪、つまり、それほど重要ではないことにおいて神の言葉に背くことは、大罪、つまり重要なことにおいて意向的に神の言葉に背くことと同じような結果、つまり、神との関係を断つという意味での霊的な死という結果をもたらすわけがありませんが、小さな罪を軽んじていいというわけもないのです。イエスが語られた通りに、「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」（ヨハ 8, 34-35）、また、このイエスの教えと多くの人の経験に基づいてカトリック教会が教えている通りに、「小罪も含めたすべての罪は被造物へのよこしまな愛着を起こさせます。」（カトリック教会カテキズム 1472）つまり、罪を犯すことによって人間は、罪の対象となっていたものとの依存状態に入るので、人間の自由意志が衰えていくということなのです。結果的に、罪を犯すたび

に、正しいことを行うことも、罪を避けることも段々と難しくなっていくわけです。

多くの人にとって罪をゆるしてもらうように願うことは、自分に対して権威があるゆえに、罰を与えることのできる人に、この罰の免除を願うことなのです。けれども、人間が体験する苦しみは、罰を与えない神の働きの結果ではなく、罪そのものがもたらす結果であるならば、なぜ罪を犯した人間が神に向かって罪のゆるしを願うのでしょうか。罪のゆるしを神に願うときに、実際に何を願うのでしょうか。また、神は罪をゆるしてくださるときに、実際に何をされるのでしょうか。

まず、イエス・キリストがご自分の言葉と行いによって教えてくださったように、神は罪を犯している人を愛しつづけてくださる、つまり、この人のために幸福を求めて、善を行ってくださるのです。罪を犯すことによって、自分を神と結ばれた絆を弱めている人、場合によって罪の奴隷になり、神との交わりを失って、自分の滅びに向かって歩んでいる人にとって最善とは、このような状態から解放されることです。神が罪びとを愛しておられるのは、良き牧者が迷った羊を探し、群れに連れ戻すように、罪を犯すことによってご自分から離れた人に近づき、いろいろな仕方でこの人にご自分の愛を表すことによって、ご自分のもとに戻るように呼びかけてくださるということなのです。また、イエスが語られたたとえ（ルカ 15,11-32）の放蕩息子のお父さんが、家に戻ってきた息子を迎え入れたように、神が回心した罪人、つまり、ご自分のもとに戻った人を迎え入れてくださり、ご自分との交わりに受け入れてくださるのということなのです。無条件の愛に基づくこのような神の働き、しかも自分の力だけでは、自由意志を取り戻すことも、永遠の死に導く道から離れることもできない人にとって唯一の希望、唯一のチャンスである神の働きこそ、罪のゆるしなのです。

このような意味での罪のゆるしは、罪を犯す前の状態にもどること、つまり、人生のリセットではないということを忘れてはいけません。罪

をゆるしていただいた後にも大きな課題がのこるのです。私たちは、カトリック教会カテキズム（1473）の中で、教えられている通りに、神のゆるしを受けて、神と和解しても、罪に対する執着が残るのです。この束縛から完全に自由になるために回心して、神と和解した人は、罪を犯す機会をさけたり、神の言葉に耳を傾けたり、祈りや秘跡によるイエスとの出会いの機会を増やしたり、イエスの教えを実行したりすることによって、キリストとの絆を強めるように努める必要があります。神のゆるしを受けても、そのような問題、また、そのような働きの必要性が残っているならば、神のゆるしを受ける意味がないと考える人がいるかもしれません。けれども、実際に、神のゆるしを受けずに、神と和解せずにそのような努力は、全力を尽くしても、成功する可能性がないですが、神と和解した後に、人間は、一人ではなく、神と共に生きて、自分の力によってだけではなく、神ご自身の力によって支えられているわけですから、この努力が成功すること、つまり人間は、完全に自由になることは可能になるのです。